



NPO法人女のスペース・ながおか

困難をかかえる女性・子どもに寄り添います



女性や子どもの人権確立のため、あらゆる暴力の根絶と女性の自立に向け取り組んでいます。当事者の方からの相談、カウンセリング、裁判・弁護士相談への同行支援、シェルターなど具体的な支援のほか、各種講演、ワークショップを通じた啓発活動も行っています。日々の暮らしの中の小さな出来事からトラブルの芽は育ちます。感じた違和感を大事にさせていただき「あなたご自身を大切にしてください」と呼びかけています。



公益財団法人こしじ水と緑の会

身近な自然環境の保全活動



身近な自然環境を守り次世代につなぐ活動として、6つの公益事業を実施。自然保護活動への助成、里地里山の動植物のモニタリング調査、河川環境保全のための調査研究、自然体験学校、自然保護・保全に関する情報発信、里山整備の理解を深める体験プログラムを行っています。自然環境の保全には「これで終わり」というゴールはありません。これからも生物多様性を含む山地生態系の保全活動を進めていきます。



知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌

上村さんと佐竹さんをゲストに迎えて開催された「長岡の協働 これまでとこれからのもーれ！」にて



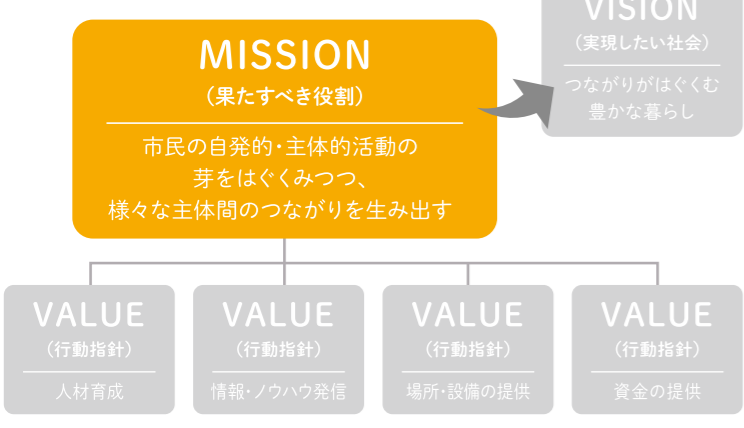
これから
これまでと
長岡の協働

市民活動 虎の巻

研究テーマ 団体の将来図の作り方～ミッション編～

春は今年の活動を始めるにあたり、団体の将来図を改めて考え直す方も多い時期。今回は前回のビジョン編につづき、ミッションの考え方をご紹介します！

例)長岡市の協働が目指すビジョン



ミッションは団体のビジョン(実現したい社会)をつくるために果たすべき役割を指します。つくりたい社会は同じでも、果たす役割は各組織によって異なります。自分たちの得意分野やらしさが出るようなミッションを考えましょう。

ミッションづくりの注意点

- 抽象的ではなく行動指針にもつながるような現実的なものにする。
- 自組織の個性や、関係団体との役割分担を意識したものにする。

10分動画で解説中！
ご覧になりたい方は、右のQRコードからどうぞ！



センターからのお知らせ

団体運営のテコ入れに！

専門家を無料派遣！

活動団体の組織運営能力アップを目指して各団体のニーズに合わせた講師を無料で派遣します。この機会に団体のお悩み解決、スキルアップを図りませんか？ヒアリングの後、派遣する専門家を決定します。まずは協働センターまでお問い合わせください。

対象 長岡市内のNPO法人、市民活動団体など公益的な活動をしている団体

募集数 4団体(先着順) 申込期間 2023年2月末まで随時受付

相談の例

- 収支を見直し、経営状況を改善したい(子育て支援団体)
- 育児休暇を取る予定のスタッフがいないため制度を整備したい(福祉系NPO法人)

発行

ながおか市民協働センター

〒940-0062
長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザオーレ長岡 西棟3F
Tel. 0258-39-2020
Mail. contact@nagaokakyodo.net

配布場所 長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。

ながおか市民協働センター

特集
上村 靖司さん
佐竹 直子さん
長岡市市民協働推進審議会

NAGAOKA PLAYERS
大堀祐子さん

活動ピックアップ
特定非営利活動法人 女のスペース・ながおか

長岡みんなのSDGs
公益財団法人 こしじ水と緑の会



長岡の協働 これまでとこれから

人が育ち、まちが育つ



上村 靖司さん
長岡市市民協働推進審議会

市民活動推進事業補助金審査会や市民協働推進審議会の委員として長きに渡り、長岡の協働を見守ってきた。自身も(特非)中越防災フロンティアなどの団体で活動している。



佐竹 直子さん
長岡市市民協働推進審議会

2010年に(特非)多世代交流館になニーナを立ち上げ。その後も市民協働条例検討委員会や市民協働推進審議会の委員を務め、現在も子ども食堂の運営など様々な活動に関わる。

います。同時に「多世代」という言葉が広まった10年でもありましたね。

一実際に活動していく中で社会のシステムに影響を与えた例もあるそうですね。

上村:安全な雪かきの方法を広める「越後雪かき道場」の活動の結果、命綱固定アンカーを屋根に付けることが豪雪地帯特別措置法に盛り込まれ衆議院を通過しました。「政治は政治家がするもの」という印象が強いですが、私は世の中をよくする活動全てが“政治”だと考えています。

出る杭を育てるまちへ

一活動者を取り巻く環境はどのように変化したと思いますか。

佐竹:「出る杭は打たれる」とよく言いますが、10年前の長岡では「出る杭は打たれるから飛びぬけろ」と言われていました。しかし今は、ながおか・若者・しごと機構や協働センターなど「何かしたい」と思った人をサポートする環境が整ったことで、「出る杭を育てるまち」になったのではないのでしょうか。

上村:一歩目を踏み出すのが一番辛くて怖いんですね。その一歩目のハードルを少し下げることがチャレンジしやすいまちをつくるのかもしれない。

一活動者を支援する環境が整ったこと以外に、チャレンジしやすいまちになった要因は何かありますか。

今思うことを教えていただけますか。

上村さん(以下、上村):自分の地域や周りにある課題を解決しようと立ち上がる活動も多く、私自身も社会にこれだけの課題が横たわっているのかと驚きました。市民活動はその地域にどのような課題があるかを知らせてくれるセンサーのようなものだと思います。佐竹さん(以下、佐竹):どこまで共通理解できているかというところは定かではないですが、「協働」という言葉が浸透したという印象をもって

2012年6月28日に長岡市市民協働条例が制定されてから10年が経とうとしています。今月号では、長岡市の協働を見守ってきた長岡市市民協働推進審議会の上村靖司さんと佐竹直子さんに、この10年間で生まれた変化とこれからの市民活動において大切なことを伺いました。

市民活動は社会課題のセンサー

一この10年間で、様々な市民活動が生まれてきました。まずは、そうした活動を振り返って

佐竹:SNSやクラウドファンディングの普及があると思います。自分たちで広報したり、資金を集めたりできるようになりました。

上村:自分たちの活動をどう見せるかという広報戦略が大切になってきていて、その点ではビジネスの世界に近づいているような気がしますね。



(特非)中越防災フロンティアが主催している「越後雪かき道場」の様子。雪かきの知識や技術の習熟度によって初級～上級の認定書を発行している。

課題解決ではなく社会的処方

一近年、人とのつながりで心や体を元気にする「社会的処方」として市民活動が注目を浴びていますね。

上村:世の中「課題を解決しなければならない」という風潮が強いですが、課題があるのは自然なことだと思っています。まちの活力は、元気に頑張っている人がたくさんいること。そう考えると、課題を解決するよりも、自分で課題に向き合い活動する主体を育てていくことが大切なのではないでしょうか。

佐竹:私が関わっている「新町みんな食堂」では、メンバーと連絡を取り合いたいからと80代の方がスマートフォンを買ってLINEの使い方を勉強しています。市民活動に参加することで「生きがいが見つかった」とおっしゃる方も多く、活動が居場所になっていると感じています。

上村:人は誰かと交流する機会があれば、それを



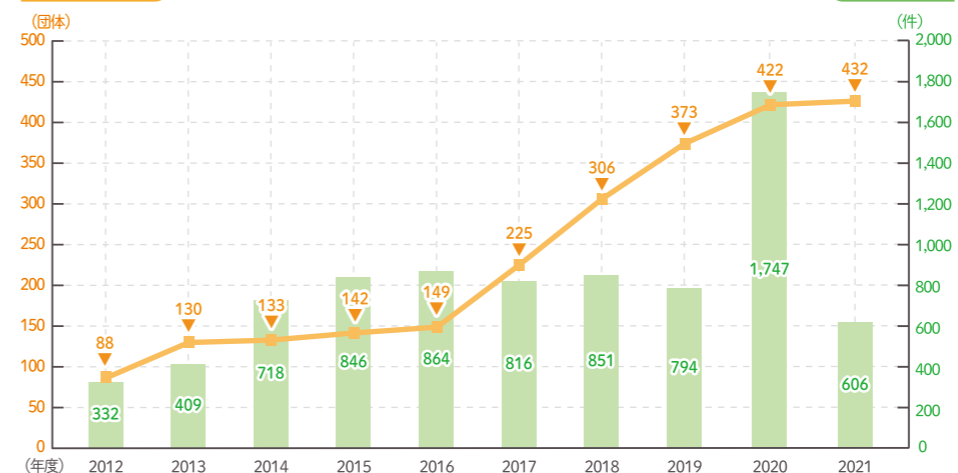
佐竹さんが関わっている「新町みんな食堂」の様子。様々な世代の方がボランティアとして集まり、一緒に作業している。

楽しみに生きられる。市民活動はその楽しみを生むもののひとつなのかもしれませんね。

佐竹:社会課題の中には、時代の流れで解決が難しいものも多くあります。たとえ解決できない課題があったとしても、市民みんなが「長岡に住んでいてよかった」と思えるまちにしていきたいですね。

市民協働条例でも将来を担う子どもたちや人材の育成について触れられているように、長岡の協働は“人”を大切に発展してきました。この10年間で「何かしたい」と思った人が挑戦しやすいまちになったのは、たくさんの市民の方が勇気を出して一歩踏み出してきたから。SDGs(持続可能な開発目標)にあるように、それぞれの社会課題を別々に考えるのではなく総合的に考えることが大切になってきています。それは一部の人だけで成しえることではなく、多様な価値観や専門性を持った人たちが協力し合っこそできることではないのでしょうか。これからも、自ら課題に向き合い前向きに頑張る人たちがのびのびと活動できる環境をつくっていききたいですね。

登録団体数



現在協働センターに登録されている団体数は432団体。「こんな活動を始めたい」「こんな人を紹介してほしい」という市民からの相談は年々多岐に渡り、年間平均800件ほどの相談が寄せられています。
※データは、2022年4月1日現在のものです。
※2020年度の相談件数には、「新型コロナウイルス感染症にまけない市民活動団体奨励金」に関する相談1,162件を含みます。

NAGAOKA PLAYERS

ウワサのあの人にインタビュー!

大堀 祐子 さん

43歳/主婦/Y's Performing Arts

1978年長岡市生まれ。高校を卒業後、東京でダンサーとして活躍。長岡へUターン後は小学校のダンスクラブや長岡雪しか祭りなどで地域と関わっている。



ひとつのボランティアをきっかけに 地域のことが自分のことへ

子どもから大人までが楽しめるダンス教室「Y's Performing Arts」を宮内地域で開催している大堀祐子さん。自身も越後丘陵公園のイベントなどで踊るママさんダンサーです。

高校卒業後に上京し、趣味で始めたダンスにのめり込み、プロダンサーになるためアメリカへの短期留学を経験。その後は東京でダンサーとして

テレビや舞台で活躍していましたが、2005年頃に目標だった師匠が急にダンスを辞めたことが人生の転機となりました。「目標を失ったことの喪失感が強く、ダンスを続けることができなくなりました。辞めてから10年間くらいはダンスを見るのも嫌でした」。

長岡へUターンし結婚。ダンスから

離れ子育てに奮闘し数年間を過ごしました。あるとき、子どもの小学校からのお便りでダンスクラブのボランティア募集を発見。これを地域でできるのは自分しかない」と志願しました。「ダンサーとして活動していた時は自分のために踊っていました。しかし声かけ一つで変わる子どもたちの成長を目の当たりにしたことで、教えることの楽しさに目覚めていきました」。最初は学校のクラブ活動でしたが保護者からの要望でダンス教室を立ち上げることに。大人も含め地域の人たちにダンスの楽しさを伝えています。

自分の得意なダンスで地域との関わり方を見つけた大堀さんは、米百俵まつりや長岡雪しか祭りのボランティアなどに参加するようになりました。「様々な人との出会いのおかげで、関係ないと思っていた地域のことが自分のことと思えるようになりました。米百俵の精神のもと、子どもたちの未来を広げる活動をしていきたいです」。

ひとつのボランティアから始まった大堀さんの地域での活動。子どもたちとつくる明るい未来に今後も期待していきたいです。



小学校でのダンスのボランティアの様子。子どもたちは目を輝かせてダンスを楽しみます。